

キム・テチャン
金泰昌

たけだやすひろ
武田康弘の恋知対話 (往復書簡)



金泰昌 2006年12月23日
白樺教育館にて (撮影: 染谷)



武田康弘 2006年9月9日
白樺教育館にて (撮影: 古林)

目次

1. 2007年5月10日 武田康弘 3
キムさんのお申し出を受けて、はじめの問題提起です。
2. 2007年5月15日 金泰昌 4
朝起きてから夜寝るまで一哲学を楽しむ。
3. 2007年5月16日 武田康弘 7
なぜ日本では「私」が肯定されないのか? へのお応え
4. 2007年5月21日 金泰昌 11
お聞きしたいことが三点ありますー「公」と「私」
5. 2007年5月23日 武田康弘 13
学校序列宗教=東大病の下では、自我の内的成長は不可能. ドレイがドレイを管理する社会
6. 2007年5月24日 金泰昌 16
「官」という巨獣による支配ー官尊民卑ー国体護持ー神妙な無責任体制
細かい違法行為は法によって処罰されるが、巨大・強力な反法行為は天下を横行してそれを
制するものなし
7. 2007年5月27日 武田康弘 20
「私」ー自我と、純粹意識 / 「ルールとしての人權」思想
8. 2007年5月30日 金泰昌 22
ソウルから、「自分の私」ではなく「他者の私」の尊重ー自己中心性のワナ

9.	2007年5月31日	「ソウルからの手紙」への応答	武田康弘	25
		独我論は、主観性の開発、掘り進めがないと越えられない。		
10.	2007年6月1日	金泰昌		28
		「自分の私」を立てるにも「他者の私」を活かすことが何より大事		
11.	2007年6月2日	ソウルへの手紙—2	武田康弘	31
		哲学は、民知にまで進むことで始めて現実性をもつ／「集团的独我論」を超えるには？		
12.	2007年6月4日	金泰昌		34
		「哲学する友」へ 他者の他者性の尊厳を重視する。		
13.	2007年6月6日	武田康弘		37
		「主観性の知としての哲学」は、「意識主義」ではありません。		
14.	2007年6月7日	金泰昌		40
		日常の生活世界も理性の外部でないことの確認ができました。		
15.	2007年6月8日	武田康弘		42
		基本合意が得られましたので、公共に開きましょう。		
16.	2007年6月8日	金泰昌		43
		二人の対話を公共時空へ。		

1. 2007年5月10日 武田康弘

キムさんのお申し出を受けて、はじめの問題提起です。

わたしは、「哲学するってどういうことかな？」と考えて、40年以上の月日がたちましたが、それは、ただ書齋の中で本を読むこととは違い、自分にとって切実な人生問題や社会問題にぶつかることで始めて生きて動くようなもの、と思うに至りました。

ひとつの論理で追うのではなく、複眼的にもものを見るのが哲学することですが、そのためには、さまざまに「対立」する世界を生きてみるのが条件になるのではないのでしょうか。いくつもの論理があるとき、それを平面に並べて比較してみてもダメで、立体としてつかむことが必要ですが、この立体視は、現実問題とぶつかり、その解決のために苦闘するところから生まれるようです。

書物の勉強は思考の訓練として重要ですが、それだけを積み重ねても、意識・事象を立体として把握することは難しいと思います。ただ知識を増やし、演繹を延ばすに留まり、自己という中心をしっかりともった立体世界がつかれないからです。

そうすると、哲学はいろいろな哲学説を情報として整理すること、という酷い話になってしまいますが、ここからの脱出は容易ではありません。それは、日本では幼い頃から、正解の決まっている「客観学」だけをやらされ「主観性の知」の育成がなされないからですが、いわゆる成績優秀者ほどこの弊害がひどく、しかも「優秀」であるゆえにこれが自覚されずに、かえって平面の知を緻密化している自分を他に優越する者と誤認しがちです。

こういう世界で生きると、人はみな実務的領域だけに閉じ込められ、ロマンと理念を育む立体的な生を開けず、即物的な価値に支配された平面的な存在に陥ってしまうのではないのでしょうか？

金さんは、どうお考えですか？

武田康弘

2. 2007年5月15日 金泰昌

朝起きてから夜寝るまで一哲学を楽しむ.

先日は最初の問題提起をいただきましてありがたく存じます。

武田さんのお陰で生活と哲学のことを改めて考えてみたくなりました。わたくしは現在まったくの一人として日本で生活しております。そして、現在のわたくしにとっては哲学するということが即ち生きているということです。朝起きて夜寝るまでのわたくしの生活と言え、その目的も過程も手段もひたすら哲学することだけです。問題意識を共有する友人たちとともに「日本を哲学する」ことです。わたくしが日本で暮らしを続けているのは金儲けのためでも、宗教の伝道のためでも、情報活動のためでもありません。どんな公職も公的地位もありません。100%私的な身分です。一私民です。日本国籍者ではないから、日本国民でもありません。ですから、わたくしの生活はまったく私的な生計によって成り立っています。そしてわたくしの活動はもっぱらわたくしの私生活にその源泉があるわけです。ということはわたくしの思考と判断と行為と責任が、一切の職務や地位に拘束されたり、影響されることのない、自由な一人・生活者・市民の立場から構成されるということを意味します。そのような立場から国家と市場と市民社会との関係をその大元から改めて考えることが必要になってきます。一人の異邦人として生きていくということは、日本人として生きていくというのとは違うでしょう。ですから、異邦人として生きていくことの実存的・人格的・制度的意味を深く考えざるを得ません。そこには当然、挫折があり立腹があり悲哀があり落胆があります。かと思えば、また意外な発見があり、予想外の出来事があり、かけがえのない歓喜があります。勿論、日本人が日本で生活する場合もほとんど同じではないかと反論されるかもしれませんが。おそらくそういう側面もあるだろうとわたくしも推測します。しかし、どこまでが共通し、どこがどう相違なるのかを確認してみたいという欲望をわたくしはどうしても放棄できないのです。この数年間、わたくしが考え悩み日本と中国と韓国の友人たちと対話を通して、共働探究してきた切実な

問題の一つは果たして「私」(事・益・利・欲・心)が抑圧・否定・排除すべき悪なのか、それとも賢明に調整・管理・活用すべき力働なのかということです。「私」は何故、否定されなければならなかったのか。「私」を肯定すると何がまずいのか。わたくしにとってはどうでもよい問題ではないのです。ほっておけないのです。ですから哲学するのです。武田さんはどうお考えですか。

わたくしの妻は時々わたくしが哲学することに凝りすぎて、気が狂ったのではないかと言います。わたくし自身も呆れ返ることがまれではありません。よりによって日本で哲学することが暮らしの目指しであり、成り行きであり、手立てであるなんて、よほど変わり者の頑固一徹ではないかと言われています。わたくしはいままで的人生の中で40年間は主に国立大学や国立の研究所で政治哲学・社会哲学・国際関係哲学・環境哲学などをそれぞれの分野の専門学者たちから教えてもらったり、また、学生たちを教えたりするなかで、すごしました。それも韓国と日本を含めていろんな国々のいろんなところで。しかし、そこで教えてもらったり、教えたりしたのは例えばソクラテスとかプラトンの哲学であったり、孔子や、孟子の思想でありました。そして、彼らについての文献学であり、事実学であり、客観学でもありました。そこにはわたくしの生活に根付いたわたくしにとっての切実な問題—私的・公的・公共的問題群—をわたくしの頭で考えわたくしの心で悩み苦しみ痛み喜び、わたくしの手足で実践活動するということはなかったのです。哲学の観客というか、傍観者の哲学といいたいでしょうか。そこには哲学の当事者、人格的生命体としてのわたくしの哲学はありませんでした。

わたくしは情報知の量的増加とその頭脳内蓄積が哲学とは思いません。哲学者の名前をたくさん覚え、書籍のタイトルを知り、学説の内容を解説することも哲学教育とそれにつながる哲学研究の一部ではあると思います。しかし、わたくしが現在、重視しているのは他者とともに哲学することです。わたくし一人で考える哲学ではなく、他者とともに考え、そして語りあう哲学です。わたくしにとって何よりも誰よりも気になる他者はいまのところ日本であり、

日本人であります。それは実は一番近いところにいる隣国・隣人なのに一番無知であり、無感覚であり、無関心であったという反省があるからです。反日・憎日・克日がいつのまにか避日・棄日・無日—日本なんてどこにあるの？—になってしまったとも言えるでしょう。わたくしがそうであったということは、日本人もそうであつただろうと考えられるわけです。ですから、お互い様です。互いに他者同士が他者を哲学するということが苦痛になるのか、喜楽になるのかわかりません。しかし、少なくともわたくしの方は心構えが出来ています。「(ともに哲学することを) 知る者はそれを好む者には及ばないものであり、それを好む者は、それを楽しむものには及ばないものである」という孔子のお勧めを武田さんとの対話を通して実証したいのですがどうでしょうか。

金泰昌

3. 2007年5月16日 武田康弘

なぜ日本では「私」が肯定されないのか？へのお応え

観想に過ぎない受動性の哲学ではなく、当事者としての能動性の哲学を、優れた「異邦人」であるキムさんと共に行うことに、私は深いよろこびを覚えます。「裸の個人」同士としての自由対話を存分に「楽しみ」たいと思います。

まず、【「私」は、なぜ否定されなければならなかったのか。「私」を肯定すると何がまずいのか。】というキムさんのご質問に応答致します。

この問題は、31年前、わたしが日本において新しい教育の必要を痛感して、独力で「塾」を開いた理由と重なります。

自分の頭を悩ませて考えること、「私」に深い納得が来るように知ること、という意味論としての学習ではなく、パターンを身につけるだけの「事実学」が支配する日本の教育は、最も反・哲学的であり、効率だけを追う教育は、人間を昆虫化させてしまう、と当時から私は考えていました。日本においては、上位者に従い、主観性を消去すること＝「私」の否定、徹底した否定が「優秀者」を生む、というわけですが、人間が人間をやめない限り、ほんとうに「私」を否定することはできませんから、必ずおぞましい自他への攻撃か自閉に陥ります。個人性を豊かに開花させる哲学が育っていないために、人間愛・関係性のよろこびを広げられない情緒オンチの形式人間が増え、それが幸福を奪います。

いま（5月16日）国会での党首討論を見ていましたが、安倍首相は、声を張り上げて、「金や物の価値だけになった現状を変えていくために、家族・地域・国を愛する態度を養うという目標を持った教育を行う必要がある。そのために『教育基本法』を制定したが、これは戦後レジームからの脱却を意味する」と述べていました。

これは、「私」（実存）からの出発という哲学原理の否定ですが、家族・地域・国を先立てるイデオロギーによって背後に隠されてしまった自我は、深いエゴイズムに陥ります。「私」の欲望をよく見つめることで「私」を活かそうとする努力のみが自我主義からの脱却を可能にするのですが、「私」を越えた概念をつくり、それに従わせるという思想は、自我の不完全燃焼を起こし、自他に有害な言動を生みます。個人の頭と心の自立・主観性の深まりと広がり育てる教育がなければ、上意下達のエリート支配に行き着くしかありません。ついでに言えば、「家族・地域・国を」と言い、「私」と「世界」が抜け落ちているのは、致命的な欠陥です。

この底なしの不幸から脱却するためには、「私」を深く肯定できる哲学による新たな教育が必要であり、そのための思想の創造と教育の実践に一生を賭けよう！子どもたちと共によるこびの多い人生を切り開こう！大きな困難が伴うことは端（はな）から承知だが、それこそが私が生きるに値する仕事だ、そう思って、独自の「塾」を始めたのが31年前のことです。それが発展して、いまは小学1年生から大学生、さらに成人者の「白樺フィロソフィー」には76才の方までが通う『白樺教育館』になったわけです。

では、いよいよ「私」は、なぜ否定されねばならなかったのか？についてですが、

わたしは、戦国時代末期以降の「封建制社会」における「上位者へ従うことがよく生きること」という道徳、及び島国・鎖国による閉じた世界が生んだ「様式主義の型の文化」の上に、明治の富国強兵のために西洋から「客観学」として輸入された学問体系が乗ることで、「私」の私性は、その根付く場所を失ってしまったのだと考えています。

西洋の学問体系の土台といなっているのはいうまでもなく哲学ですが、思想や哲学においては、いわゆる「正解」は無く、あるのは、有用で・豊かで・魅力ある「考え方」だ、という原理が知られずに、「真理として輸入された哲学」

を東京大学の権威と共に学ぶ・暗記するという「官学＝権威学」に陥ってしまったのです。人々の生活世界の問題を改善し、生を豊かにするための学問（その中心は哲学）は、反転して人々を管理し、権威に従わせるための道具にまで成り下がってしまった、といわけです。ひとりひとりの主観を豊かに育む「主観性の知」としての哲学までもが「客観学」化され、現代に至っています。

もちろん、中江兆民や植木枝盛など本来の知のありように忠実な優れた先達も数多くいて、彼らは「自由民権運動」を起こしましたが、明治の超保守主義者で「天皇教」による国家運営を行った山県有朋らによって徹底的に弾圧され、なきものにされました。明治政府は、1890年代（明治半ば）以降は、「国民教化」という名で、天皇現人神（てんのうあらひとがみ）の思想を「天皇史としての日本史」と共に小学生に教え込み、同時に、古来の「神道」の内容を大きく変え、新宗教―「神道の国家化」も完成させました。その総本山が『靖国神社』（明治2年に天皇のために斃れた人を祀る『東京招魂社』として政府がつくった施設を10年後に「神社」と改称）です。この明治の近代天皇制という「集団同調主義」に対する哲学次元における明晰な批判がなされてこなかったために、第二次世界大戦後の日本もなお、哲学の原理である「私」という実存からの出発＝主観性を掘り進める営みがなく、歪んだ客観学である受験知に支配されてしまうのだと考えています。

詳しく論じればきりがありませんが、結論を言えば、国家の宗教的な最高権威者に天皇を据え、かつこれを主権者にした全体主義的な体制にとって、市民がそれぞれの感じ思うところにつき、考えをつくり述べるということは、極めて都合の悪いことであるがゆえに、「主観」とは悪であるかのような想念を学校教育によって徹底させた、ということでしょう。そのために従来の「様式主義の型の文化」の上に、新たに輸入した西洋学問の大元である哲学を「客観学」化させて結合し、ほんらい主観性の知である哲学からその魂を奪った、それが意匠を変えながら生き続けている、私はそう見えています。

「私」を肯定すると何がまずいのか？ についても、以上の考察でご理解頂けるのではないのでしょうか。答えの決まっている勉強・学問だけがあり、ひとりひとりの主観性を豊かに育て鍛える教育がない国においては、集団同調による同一の価値観が支配してしまいます。右派左派を問わず、「私」という主観を肯定し、そこから始めることは、予め定めた方針でものごとを進めるのにマイナスになると考えるのです。「違い」があるから考えは強く大きくなり、多彩な世界が開けるのだ、という自由対話に基づく思想の広がり、それによる物事の決定という実体験がない世界で生きれば、「違い」＝異論・反論とは非生産的なものであり、秩序を壊す悪いものとしか感じられません。「私」とは排除すべきもの、和を乱すものとなってしまいます。

相手の揚げ足取りと自我拡張の論争しか知らず、対話する愉悦や生産的討論の有用さを知らなければ、人間愛—関係性を広げ深めることのよろこびとは無縁な場所で生きる他なくなります。異があるから面白い、異があるから始めて和が生じるということは、「私」という中心をしっかりもった立体の世界を生きなければ分からないはず。赤裸々な「私」から始めなければ、全ては砂上の楼閣だ、私はキムさんと共にそう考えています。

以上がお応えですが、いかがでしょうか？

武田康弘

4. 2007年5月21日 金泰昌

お聞きしたいことが三点ありますー「公」と「私」

早速お聞きしたいことが三点あります。

“まず第一点ですが「事実学」が支配する日本の教育は、最も反・哲学的であり、効率だけを追う教育は、人間を昆虫化させてしまう”ということですが、反・哲学的な教育が日本の社会風土と文化特徴を反・哲学にしているのか、それとも反・哲学的な社会風土と文化特徴が教育を反・哲学的にしているのか、また相互強化的なのか、どう考えたらよろしいでしょうか。多数の日本人の学者や言論人たちの書いたものを読んだり、また直接お会いして聞いたりしたことで、日本人は元来哲学や思想が嫌いで物を創ることや実際経験したりすることを大事にするのが、その特性ということ。それが日本人のよさであり、日本文化のすぐれた面であると言われたこともあります。私が1990年来日以来、日常生活を通して皮膚感覚的に実感したことも抽象的なことに対する否定的な対応ですね。抽象思考を嫌うという傾向です。ですから、誰々の思想の研究はいろんなものがありますが、自分の脳と心と身で練り上げた哲学—本当に哲学すること—への意思と願望と忍耐の生々しい力働を分有・共感・共鳴できるものが少ないという意味で非・哲学的な環境であると言えますね。しかし、わたくしの感覚が間違っているのかも知れませんから、武田さんのご意見を伺いたいのです。

第二点は日本で「私」（事・心・欲・利・益）が否定されなければならなかったのは戦国時代末期の「封建社会」における「上位者へ従うことがよく生きること」という道徳と、明治の富国強兵のために西洋から「客観学」として輸入された学問体系が乗ることで、「私」の私性は、その根付く場所を失ってしまったからだと考えているということでしたが、わたくしが知りたいのは、「上位者へ従う」というとき、上位者の「何」に従うということなのかということ。それは上位者の「私」（事・心・欲・利・益）ですか。それとも上位者が声高く

唱える「公」(事・心・益)ですか。上位者への忠誠は「滅私奉公」という言い方で美化奨励されましたし、下位者の「私」は上位者の「公」のために徹底的に抑圧・排除・犠牲になりましたが、その「公」というのは上位者自身の滅私・破私・無私によるものであったと言えるものでしたか。

そして第三点です。一人ひとりの主観性を豊かに育て鍛える教育がない国においては、集団同調による同一の価値が支配してしまうということと、その前に国家の宗教的最高権威者に天皇を据え、かつこれを主権者にした全體主義的な体制にとって、「主観」とは悪であるかのような想念を学校教育によって徹底させたとおっしゃったことに関係するのですが、それをわたくしの言い方に変えますと、一人ひとりの「私」(事・心・欲・利・益)をまったく認めない、すべてが「公」で「公」以外には「主観」という悪しか存在しない体制こそ全體主義体制であり、すべての「公」が天皇によって象徴される滅私・破私・無私体制は天皇制的全體主義体制以外になにもものでもないということになります。このような理解でよろしいでしょうか。わたくしは、所謂全體主義に関する多様な定義・規定があるということをも十分承知したうえで、あえて申しますが、一つの「公」—それが実体として何であれ—がありとあらゆる「私」を全否定する体制・装置・仕組・思想・イデオロギーは全體主義的であると思うのです。武田さんのお考えはどうですか。

金泰昌

5. 2007年5月23日 武田康弘

学校序列宗教＝東大病の下では、自我の内的成長は不可能.

ドレイがドレイを管理する社会

「私」が生かされない日本の現状を解明するための「問い」に感謝します。
早速お応えします。

まず1について。

結果的には、両者は「相互強化的」であるわけですが、そのはじめの原因は、「反・哲学的な教育」にある、と私は確信しています。

また、日本の現状が「非・哲学的な環境である」というのはその通りですが、「日本人は元来哲学や思想が嫌いで物をつくることや実際経験したりすることを大事にする」というのは、ひどいウソとしか思えません。日本人の学者や文筆業者からこういう意見が出てくるのは、彼らが人々の「黙せるコギトー」の声を聴く耳を持たず、ただ活字化・映像化された情報に頼ってしか「現実」を見ることができないからでしょう。

次に2について。

「上位者の何に従うのか？」ですが、

まず、【下位者の「私」は上位者の「公」のために徹底的に抑圧・排除・犠牲になってきた】という現実を変えるための金さんの凄まじいまでの奮闘努力に深い敬意を表します。

お応えします。

日本における「上位者」とは、ほとんどの場合、「私」としての意見を持たない・言わない人です。そうでなければ上位者にはなれません。彼らは、自分の考えを鍛えるのではなく、上位者たるにふさわしい態度を身につけ、周囲にうまく合わせる言動に磨きをかけるのが生き方の基本形となっています。上位者となった人は、既成の価値意識とそれを支えるシステムの維持・管理を自己目的化し、通常それ以上のことはしません。

このように内実を追求せず、カタチのみを追うというのは、意味論や本質論としての学習・学問がなく、単なる事実学に支配される知のありようと符合していますが、そうだからこそ、出身学校名による単純な序列主義が成立します。ほとんどの日本人は、キツイ言い方をすれば、東大を頂点する「学校序列宗教」の信者だと言えますが、この〈序列による意識の支配〉が「私」の発展を阻害してきました。哲学の命である自由対話が成立しないからです。

しかし、私は子どもが好きで教育を仕事としていますが、子どもの多くは、どうして？なぜ？と考えることが嫌いではありません。「事実学」を効率よく習得するために不都合となる【質問と対話】を嫌がる親や教師の意向に従わされ、変えられてしまうまでは。

結論を言えば、このようにカタチ・結果を優先し、序列に基づく統治が行われている社会では、「上位者」に従うのは、上位者の「何か」（内容）には関係なく、それが上位者であるからだ、という事になるわけです。序列主義の想念は、中学生がよく言う「先輩の命令には逆らえない」という言葉に象徴されています。

以上は、最後の問い—天皇制の問題と結びついています。

キムさんも強調されるように、狭い「私」＝エゴを越え出るためには、徹底的に「私」につくことが条件となりますが、失敗と試行錯誤を嫌がり、決まった型に早く嵌（はめ）ようとする教育の下では、自我が内的には成長せず、「私」が「私」にはなれませんかから、合意形成の作業がはじまらず、「公共」という意識も生じません。こういう社会では、上からの命令＝「公」（既存システムの維持に必要な権力者の集合意志）だけがある、というわけです。

日本の「エリート」のほとんどは、受験知に囚われ、システムが命じる価値意識に従うだけで、失敗を重ねながら自我を成長させる生き方をしてこなかった人々ですから、かれら自身が、既成制度のドレイでしかなく、そういう意味では、日本とはドレイがドレイを管理する社会だ、とも言えます。中身・内容の進展ではなく、制度の維持それ自体を目的とするシステムの中では、具体的

な現実問題に対しては誰も責任は取らない・取れないということになり、現場にいる人間だけが出口のない状況に追い込まれて苦しむのです。こういう無責任性の体系＝集団同調主義による社会システムの最上位に天皇という存在を置くわけですが、それも個人としての人間ではなく、天皇制というシステム内人間＝現人神です。したがって、現実に対する責任は取れません。グルグルと堂々巡りで、どこにも誰にも責任はなく、結局はなにごとにも自然災害のようにしか意識できず、「しかたなかったんだ」ということになるわけです。

では、最後に、明治政府がつくった「近代天皇制」の定義についてです。

確かに「近代天皇制」＝「国体思想」が「全体主義」であることは、私も間違いないと思いますが、「天皇教」とでも呼ぶべき「明治政府作成の擬似的な一神教」の「神」と規定した天皇を、同時に現実政治の主権者としたのですから、事は複雑で、「国家宗教に基づく全体主義」とでも呼んだらいいのではないかと思います。

この天皇による統治を支え、実務を行ったのが、東大法学部卒の官僚であったので、彼らは「天皇の官吏」と呼ばれていたわけです。周知の通り、この明治政府がつくった官僚制度は、戦後もその基本のありようを変えずに今に到っています。この「官」による「公」（権力者の集合意志）を「民」による「公共」（市民的な共通利益）に変えようとする金さんの努力には、ほんとうに頭が下がります。民主制社会における「官」は、ほんらい主権者である一人ひとりの市民の側に立って仕事をしなければならないはずですが、依然として既存のシステムを維持するための「公」という装置でしかなく、公共世界を拓くという発想にはなりません。

この現状を変えるには、「民から拓く公共」という発想の下に「官」を位置づけ直す以外にはないと思いますが、この点、金さんはどのようにお考えでしょうか？お聞かせ願えれば、と思います。

武田康弘

6. 2007年5月24日 金泰昌

「官」という巨獣による支配—官尊民卑—国体護持—神妙な無責任体制

細かい違法行為は法によって処罰されるが、巨大・強力な反法行為は天下を横行してそれを制するものなし

“「黙せるコギトー」の声を聴く耳を持たない日本の学者や文筆業者のひどいウソ”という表現には魅了されました。しかしそれは日本の学者や文筆業者に限られた宿痾ではないと思われまます。言語以前の沈黙の深層の底に流れる情動のマグマを感知するという事は並外れたわざ（技・業）ではないでしょうか。誰にも期待できることとは言えません。ですから、何とか彼ら・彼女らの声に謙虚な耳を傾けることにしてきたつもりですが、日本では異邦人であるわたくしの語り掛けに心を開いて応答してくれるというのが、極くまれなのです。ですから読んだり、聴いたりしたことがウソなのかどうなのかもよく分からないのかも知れません。しかしです。武田さんのご意見では日本人が大体抽象思考とか一般化思考を好まないとはお考えにならないのでしょうか。例えば、自分の身内のことになるとものすごくやかましくなるわりには、他人事になりますと冷淡であり、ほとんど思考停止になるということを普段日常生活を通して感じているわけです。北朝鮮に拉致された親類の人権は声高く叫びまわりながらも自国の軍隊によって踏み躪られた近隣諸国の数多い私人たちの生命と尊厳に対しては、証拠が無いとか、他の国々もやったことではないかというような非理・無理・背理をもってごまかして平然としていられるというのが、どうも理解できないのです。ものごとを自他相関的に考えるということ、そして適当に距離を置いて見るというのが抽象思考というのですが、そのような思考回路は十分作動していないように感じられるのです。もしかしたらそれは、「上位者に従う」ということが「上位者の具体的な命令の内容を自分の頭で判断してから服従する」というよりは「上位者の意思」と思われ、そのためになることと勝手に決めて手前に用意されたマニュアル通りに行動するだけのことが限りなく繰り返され、自動拡大再生産された結果かも知れません。ですから個々人は別に自分の問題としてそこに具体的ななかかわりを感じないし、したがいまし

て自責の念も何もないということですかね。あえて言えるとしたら、すべてはお国のためにやったことだし、それを天皇の御国を守るためのことであったということで正当化されると思っているのかも知れません。すべては「公」（＝国体）の護持のためであるという最終的なお墨付きによって罪悪感は消去されるということなのではないでしょうか。であれば初めから終わりまでそこにあるのはシステム＝国体としての天皇制という「公」だけが実在し、すべての「私」はその中に融合無化されるわけですから、誰も責任を負うとかということが構造的に不可能になっているわけです。実に神妙な無責任・脱責任体制ですね。細かい小さい違法行為は法によって処罰されますが、巨大・強力な反法行為は天下を横行してそれを制するものなしという状態のように見えてしょうがないのです。

“日本における「上位者」とは「私」としての意見を持たない・言わない人”であり、“そうでなければ「上位者」にはなれない”というのも日本だけの事情ではないと思われまます。“自分の考えを鍛えるのではなく、上位者であることを示す言動に磨きをかけるのが日々の生き方の基本形になっている”という現象もどこでも目にするような日常茶飯事ではないかと思えます。問題はそのような「上位者」たちが、自分たちのキタナイ「私」（事・心・利・欲・益）を「公」の名の下に充足させながら一般市民たちの細く小さい「私」（事・心・利・欲・益）を犠牲にするということなのです。「公」の実体は果たして何なのかということ冷静に考えてみますと、それは結局武田さんのおっしゃる通りの上位者の命令＝既存システムの維持（管理）に必要な（だけにこだわる）権力者の集合（団）意思（及びその仕組）でしかないということですね。それが国民・市民・個人全体のためという口車に乗せられて「私」（の生命・生存・生業）が徹頭徹尾否定されてきたというのが問題ではないかということです。

わたくしは「民から招く公共」という考え方に対しても、もっとつつこんで調べる必要を感じます。わたくし自身は一人ひとりの私人の「私」（事・心・利・欲・益）を殺すのではなく、活かすというのが発想と行為の原点になる必要を強調したいのです。そして「私」は単独ではなく、複数が存在するわけで

すから、「私」と「私」とのあいだから、たがいの「私」を活かしあうというのが公共生の現場であるという捉え方を基本にするということです。今までの最大の問題は「公」という名の下に巨大・強力な一つの「私」が他のすべての「私」を弾圧・抹消・否定したということです。皆のためというのは「権力者」の一方的な思い上がりにすぎないのです。「みんなのため」というのは実際には（具体的な）「誰のためでもない」ということになりすし、それが「善」であるという思い込みを伴うから厄介なことになるのです。「公」と「私」は同一論理の表と裏、大と小、強と弱という関係で相互包摂の関係にあるという実像が見えてきたのです。ですからわたくしはそのようないつわり（偽・詐）への執着から脱出して「私」と「私」との相克・相和・相生のプロセスからたがいの連動向上をはかるという意味の公共を重視するのです。これこそ本当の意味における官民共働であり、私民主導の公私共媒であり、一人ひとりの私人の幸福が複数の自他共福の始動をもたらし、それがたがいの幸福の善盾還作用を回転させる原動力になり、そこから幸福共創の公共世界が拓かれるという展望なのです。わたくしは「民」という漢字のもともとの意味が嫌いです。それはメクラ（盲・瞽）であり、ドレイであるからです。ですからあえて「私人」と言いたいのです。従来は「公人」と言えば何だか偉い権威がついた人間のような感じがありましたが、「公人」とは結局「私人」たちが出した税金を使って私人たちの幸福を実現し、それを妨害するものから保護するための生活装置の管理・運営を委託された代理人であると言えるでしょう。それが「公」という美名の下で自分たちの委託者をばかにしてきたわけでしょう。ばかにするのにも程があるということで、私人たちが怒りはじめたのが、今日の反官僚的社会心理というものではありませんか。官がそのような現実をきちんと自覚するようになれば「私人から拓く公共」というのが社会を変えることになると思います。「私」はエゴイズムだからだめだというのが正統的な道徳論ですが、「官」は合法的に正当化された強者の「私」の構造化・組織化にすぎない一方、私人たちの「私」は合法的正当化の枠外に放置され、構造化・組織化への途が塞がれました。しかしそのような「官」優性の制度思考は官尊民卑と滅私奉公という時代錯誤的心情倫理によって強化・増幅されたのです。しかしそれは、近代

国家という名の「公」の制作にともなう虚偽意識でしかないとは考えられませんか。「官」という巨獣が必要とする成長ホルモンのようなものではないかと考えられますが、わたくしの個人的な見解ですが、「公」からは「公共」への開き直りがほとんど不可能であります。「公」とは統合・統制・統一の垂直的力働であります。それとはまったくちがいまして、「公共」とは多様・多元・多層の水平的共働であるからです。それは「公人の指示」ではなく、複数の相異なる一人ひとりの老若男女たちの「私」（事・心・欲・利・益）をそれぞれの相克・相和・相生のプロセスを通して共に向上・実現・盾還させようとする「私人の工夫」なのです。ですから一度私人の立場に戻って考えるということが先決課題ですね。そこから出てくる私人たちの力がより人間を幸福にする社会を創るには、「私」の見直し・立て直しから始まるのが現実的な道筋ではないかと思われませんが、武田さんのお考えはどうでしょうか。

金泰昌

7. 2007年5月27日 武田康弘

「私」—自我と、純粹意識 / 「ルールとしての人権」思想

「私」から始める、というキムさんのお考えには、全面的に賛成です。実存思想は、わたしの人生そのものですから。

けれども、「私」から始めるという時の「私」とは、わたしの場合、対象化された己＝自我ではなく、「私」の意識の水面下を見ることから始まります。自分自身の「黙せるコギトー」の声を聴く練習が、哲学するはじめの一步＝実存論の原理だ、と考えているのです。

言語化される以前の広大なイマジネーションの世界を感じ知ること、「私」の中の無限の宇宙に驚き、悦ぶことが、哲学することの芯だと思うのです。

したがって、私＝哲学の出発点とは、言語化され、経験的な次元で自我となった「私」ではなく、沈黙の深層である「黙せるコギトー」＝広大な「宇宙」なのです。

それに声を与える作業、言語化していくプロセスが、哲学の練習であり、現実化であると考えています。

以上の意味で「哲学する」のは、日本人のみならず、「私」の純粹意識ではなく「私」の自我による思想の闘いに明け暮れる世界の人々にも、とても大切なことだと思っています。

次に、日本人が抽象思考とか一般化思考を好まないのではないか？というキムさんのご質問ですが、現状は確かにその通りだと思います。その現実を変えるために、『白樺教育館』では、意味論・本質論としての学習に取り組んでいるわけです。

また、「神妙な無責任・脱責任体制」の問題、及び、「細かい小さな違法行為は法によって処罰されるが、巨大・強大な反法行為は天下を横行してそれを制す

るものなし」、というキムさんのご指摘は、全く同感です。その異常な社会のありようを正せない日本人の問題については、私は「思想なき人間は昆虫の属性を示す存在でしかありません」というブログ（「思索の日記」2006年7月30日）にも書いた通り、無自覚のうちに誰でもがもっている思想＝価値意識の束を、顕在化・意識化する努力の必要を訴え続けてきました。『白樺』における哲学実践もそのような考えの元に行われています。

最後に「私」と「公」の問題です。

「私」とは、エゴイズムだからダメだ、という俗流「道徳論」と、その思想に基づく強者の「私」にすぎない「官」による日本支配の問題ですが、その現実を変えるための原理的な思想を「共生社会のための二つの人権論」という本に現した金泰明（キムテミョン）さんが、昨日『白樺教育館』の大学クラスに参加され、その後で、夜遅くまで対話しましたが、自己中心性からの出発は哲学の原理であること、そこから「ルールとしての人権」という考えが導かれるというのは、わたしたちとも完全に一致するものと思いました。

しばしば、「官僚独裁国家」と規定される日本社会を内側から開いて行く基本条件是、キムさんの言われる【「公人」とは結局「私人」たちが出した税金を使って私人たちの幸福を実現し、それを妨害するものから保護するための生活装置の管理・運営を委託された代理人である】という民主制社会における「官」の本質をみなぎ自覚することですが、立憲主義の国家においては、「憲法」の理念と条文に示された市民の意思を守り・実現することが仕事・職務であるはずの公務員、とりわけ官僚がその原則をわきまえるように指導する必要も大きいと思います。公務員研修に携わるキムさんに期待するところです。私のみるところ、その原則への明晰・透明な自覚を持っている人は少なく、愚かな想念一国家の指導者気取りの官僚が多いようです。これは深い思想の闘いですが、そのためには、誰もが納得せざるを得ない原理的思想（民主制社会の原理）を示すことが必要だ、というのが私の考えです。いかがでしょうか？

武田康弘

8. 2007年5月30日 金泰昌

ソウルから、「自分の私」ではなく「他者の私」の尊重—自己中心性のワナ

5月28日から韓国ソウルにきています。27日付武田さんのメールは昨日、池本さんから送ってもらいました。

まず「私」のことですが、もしかしたら武田さんの考え方とわたくしのそれが違うのかも知れません。ですから丁寧に語りあう必要が感じられます。わたくしの基本的な考え方は「私を活かす＝活私」から公共哲学的思考・判断・行為・責任を始動させるべきだということです。「私」から始めるというのとはやや違うのではないかという気がします。そして「私を活かす」という場合、その「私」は「自分の私」ではなく「他者の私」を優先するということです。自分自身＝自己というのは単独でおのずから生成するものではなくて、他者との関係の中で他者との対比を意識する過程で生成・形成・造形されるもの—ものというよりは出来事・事件・ことというべきです。今まで「私」を専ら「自分自身の私」に限定し、それだけに執着し他者への開き・かかわり・つながりを重視しなかったから「私＝エゴイズム—自我至上主義」という捉え方が固着したと思うのです。

「私を活かす＝活私」とは「他者の私」を無視・否定・排除することによって成立する「自分自身だけの私」ではなくて、「他者の私」を認め・尊重し・敬意をはらうという他者への関心の濃度に正比例して生成・生長・成熟する「自分自身の私」という自他相克・相和・相生の連動の出発点とも言えるでしょう。

ですから、“自分自身の「黙せるコギトー」の声を聴く練習が哲学するはじめの一步＝実存論の原理”というのはい己論＝自己哲学の基軸として過去から現在に至るまでの正統哲学によって強調されてきた哲学のあり方の標準でありました。わたくしも長い間そのような哲学の訓練を受けましたし、またそのように教えたのです。しかし、1990年の来日以来、日本とアジア、そして日本と

世界の関係を政治とか経済とか貿易とか安保という側面に焦点を置いて考えるのではなく、「哲学する」という立場からその大本を見直すという場合、どうしても気になるのが個人的・集团的・国家的・民族的自己中心性への執着から生じる他者無視・弾圧・否定という問題であります。それはどちらかと言いますと、自己から他者に向かっての一方的な心理・行動・態度・判断です。結局、自己中心性のワナにはまっているということです。

武田さんのおっしゃる“「私」の中の無限の宇宙に驚き、悦ぶことが哲学することの芯”というのが自分自身とは全く違う、自分自身の全てをもって最善の努力をしても尚かつ理解と納得の彼方に、自分自身の一切を超越して自分自身に問いかけてくる他者の存在とその中に隠れている無限の未知の宇宙に畏れを感じ、身勝手な同化を戒め、いつでもどこでも自己反省・自己批判・自己再生を促す「他者の私」と、それと連動する働きを通して生まれてくる「自分自身の私」を同時に意味するのであればまったく同感するところであります。しかし、今までお会いし、語り合った数多くの日本人学者たちの場合は、ほとんど「自分自身の私」の中だけを深く深く探っていくということに偏重していました。

わたくしはまだ金泰明さんとはお会いしたことがありませんし、彼の著作を読んでもいないわけですから、なんともいえないのですが、わたくしは所謂「人権」というのは一般論としては誰もが一応、その重要性と必要性を認めながらも具体的・実践的な問題として「誰の人権」なのか、そして、「人間の公的人権」なのか、それとも「私的人権＝私権」なのか、どこまで念頭に入れ、どこまでを保障するという事なのかということも誠実に考えてみる必要があります。「人権宣言」が「人間と市民の人権宣言」という言い方をしているのも「私的人権」と「公的人権」をきちんと念頭に入れた人権の公式化・公認化を意味するものと捉えます。わたくし自身はそれに加えて今後、公共的人権論というのを皆様とともに議論していきたいと思っています。武田さんも憲法の問題に言及なさいましたが、従来の憲法論—日本での議論という意味です—の人権論

は圧倒的に公的人権論に偏っています。民法で「私権」が尊重されるという原則が明示されていますが、わたくしは今後、国家・政府が一方的に公認する公的人権論ではなく私人が人間として国家・政府に対して要求し、それが尊重されることを権力を持って、妨害・阻止できないという公共的人権論を強調したいのです。国家・政府の自己主張の一方的強制ではなく、私人＝人間＝市民という他者とのかかわり方を一変させるところから始まる哲学こそが公共哲学であると思うのです。なんだか急に堅くなりました。すみません。武田さんのお考えをお聞きしたいです。

金泰昌

9. 2007年5月31日 「ソウルからの手紙」への応答

武田康弘

独我論は、主観性の開発、掘り進めがないと越えられない。

キムさんのソウルからの応答文は、一言で言えば、「独我論」をどう乗り越えるか？ですが、これはなかなかやっかいな問題で、十数年前にわたしが企画した討論会のテーマでした。サルトルやポンティの邦訳者で哲学者の竹内芳郎さんと、当時、文芸批評家で独自のフッサール読解を世に問うていた竹田青嗣さんを中心に行いましたが、都合6回、一年以上にわたる議論は白熱したものとなり、最後は空中分解に終わりました。

キムさんの一番はじめのお考えー「わたくしの基本的な考え方は「私を活かす=活私」から公共哲学的思考・判断・行為・責任を始動させるべきだということです。」という思想には、わたしも共感し賛同していますが、その「私」をどのように位置づけるのか？「自分の私」=自我と「他者の私」=他我の問題をどう考えるのか？という純哲学的な次元の問題になると、確かに違いがあるようです。

この込み入った問題を「往復書簡」という枠組みでうまくできるかは疑問ですが、できるだけ明晰化するように努力してみます。

まず、「「他者の私」を認め・尊重し・敬意をはらう」にも「自他相克・相和・相生の連動」にも全く賛成ですが、それは、やはり、私（例えば武田）がそのように思い・考え・生きるわけですから、「私の決断」なのだという自覚は、いつも持ち続ける必要があるはずです。「他者の信憑」も「私の意識」において成立しているのだ、ということの自覚が弱まれば、却って他者との相克・相和・相生も難しくなってしまうでしょう。

「他者の私を優先する」という思想や行為であっても、自分がそう考え・そ

う行為しているわけですから、それが「自分の考え」であることに変わりはありません。また、世界の内に存在している我々は、自分の外にある世界・他なるものと一緒にでなければ「考える」こともできませんから、自・他・世界は、連動して働いているわけですが、「私」＝自分の考え・行為には、私が責任を負うしかありません。

確かに、「『自分自身の私』の中だけを深く深く探っていく」というのは、不毛でしかありませんが、逆に「自分の私」を放棄してしまえば、外的人間になってしまいます。わたしもずっと長いこと、他者（子どもや異性とも）と共に哲学し、そうすることで自他を豊かにする営みに精魂を傾けてきましたが、自分が直接できることは、「自分の考えを広げ、深め、豊かにすること」であり、他者もまた同じです。

「自分自身＝自己というのは単独でおのずから生成するものではなくて、他者との関係の中で他者との対比を意識する過程で生成・形成・造形されるもの一ものというよりは出来事・事件・ことというべきです。」というのは、全くその通りで異議はありませんが、わたしが言う、【「私」の中の無限の宇宙に驚き、悦ぶことが哲学することの芯】と少しも矛盾する話ではありません。自分自身＝自己の発生過程を知ること、その本質を知ることとは、次元を異にする話なのです。「私」は「他」が驚き・悦んでいるのを感じ知ることはできますが、その内実は、「私」の確信としてもたらされる以上にはなれません。他者を知り、同情あるいは共感・共鳴することはできますが、他者の具体的経験を他者に成り代わって「私」がすることは出来ないからです。その原事実をよく自覚することが、外からの要請ではなく内側から「独我論」を破ることになる一他者の私（他我）と共に哲学することによって、「私」（自分の私＝自我）の主観を鍛え、掘り進め、その深化・拡大を目がける作業が、客観主義に陥らずに主観主義（独我論）への転落を防ぐ唯一の方法だ、私はそう考えているのです。なお、ついでに言えば、独我論が困った問題なのは、それが自他の悦びを広げられない思想だからです。

次に、人権思想についてですが、キムさんの主張されている「公的人権」でも「私的人権」でもない「公共的人権」の内実は、金泰明さんの「ルールとしての人権」という思想にあると思います。それは互いの「自己中心性」を認め、そこに依拠しつつ、内側からそれを超えていく思想です。

では、ソウルへの旅でお疲れがでませんように。旅の安全をお祈りしています。

武田康弘

10. 2007年6月1日 金泰昌

「自分の私」を立てるにも「他者の私」を活かすことが何より大事

昨夜は18時から23時まで西江大学^{ソガン}の哲学部の教授及び大学院生たちと公共哲学の具体的な問題を心を開いて語りあいました。問題はいろいろ出ましたが、他者論＝他者の哲学＝自他関係論が純哲学的な次元というよりは正に現実的・実存的な次元から詳細に議論されました。韓半島は常に外国＝強大国＝外部＝他者からの直接・間接脅威を受けつづけていますし、国内外の諸々の状況が日本のように平穩無事ではありませんから感覚というか、捉え方が日本とはかなりちがいます。十年前のこととか、竹内芳郎さんや竹田青嗣さんと現在のわたくしは、全然ちがう立場—状況—観点—問題意識—現実対応に逼られています。ですから「哲学する」友であり、共働対話者である武田さんと向きあって語りあうということも彼らとの対話とはその方向も内容も、またそこにかかる期待も同じではないのが当然です。

「独我論」をどう乗り越えるか？という哲学的問題ではありますが、わたくしが武田さんと共に考えたいのは、日本人にとっての韓国人—韓国人にとっての日本人やそれ以外の多様な自国人＝自己対外国人＝他者が世界のいたるところで政治・経済・社会・文化・宗教などなどありとあらゆる分野・局面・境遇で対立・衝突・紛争の原因になっていますし、そこから言い切れない悲惨な悲劇が生じているわけですから、十年前の議論が空中分解に終わったからと言って放棄することができないのです。

武田さんがおっしゃるように“「私」の中の無限の宇宙に驚き、悦ぶこと”と“他者の「私」の不可思議・理解不能の深奥”との両方を相関媒介的に考えることが大事であるということを申し上げたわけですから、武田さんとわたくしのあいだにそれほど大きなちがいはないという気がしました。よかったと思います。それは考え方が互いに似ているからよいというのではありません。互いに正直な対話ができよかったということでもあります。“他者の驚き・悦びの内

実を「私」の確信としてもたされる以上にはなれません”し、“他者の具体的経験を他者に成り代って「私」がすることは出来ない”からと言って、自分自身の内面に閉じ込むのではなく、そのような不理解・不把握の彼方にいる他者を他者としてそのまま尊重することが何よりも重要だと思うのです。他者を自分自身の理解・納得・解釈の枠の中に回収・消化・位置付けしようとするから他者の他者性を奪取することになるのではありませんか。勿論“私の決断なのだという自覚”が必要ですし、“「自分の私」を放棄してしまった外的人間になってしまう”ことを是認しているのでは決してありません。「自分自身の私」を強化するために「他者の私」を犠牲にし、排除し、否定するのは結局「自分自身の私」の犠牲・排除・否定をもたらすことにもなるということをお願いしたいのです。ですから「自分自身の私」をきちんと立てるためにも「他者の私」を活かすことが何よりも大事な思考・判断・行動・責任の原点ではありませんかと問いかけています。

武田さんもおっしゃっていますように“「自分自身の私」の中＝内面の宇宙だけを深く深く探っていく”というのは不毛であるだけではなく、他者無視の横暴にもなりますので、それが現実的・実存的に深刻な問題であるとわたくしは思うということです。

昨夜の議論の中にも人権論が出てきました。人権弾圧の極限状況の真只中で、いのちがけの闘争をつづけ、結局ある程度の成果を勝ちとった民主化運動の実体験をもっている人々ですから抽象的・文献的考察ではなく、生々しい体験に基づいた現実論でありました。武田さんのことも皆さんに紹介し、30年以上の間、専ら自力で一市民としての哲学運動を展開してきた「哲学する市民」の姿に深い共感を感じたようです。

自己と他者の問題はフッサールやサルトルやメルロ・ポンティが誠実に取り組んだ問題でありましたし、それがデリダ、レヴィナス、リクールそしてトドロフなどに継承されてきた大問題ですから往復書簡を通して語りつくせないでしょう。わたくしも決してこのようなかたちで決着がつくとは思いません。ですがこの問題が、今のわたくしにとっては、最緊急課題の一つですので、日本

でも中国や韓国でも共に語りあっていくつもりです。

今日は朝からアジア哲学者大会に行きます。何かありましたらお知らせします。

ソウルから 金泰昌

11. 2007年6月2日 ソウルへの手紙—2 武田康弘

哲学は、民知にまで進むことで始めて現実性をもつ／「集団的独我論」を超えるには？

キムさん、ご活躍ですね。よろこばしいことです。

海を隔ててリアルタイムでの往復書簡、とても愉快ですね。インターネットの善き活用です。

早速ですが、本題です。

キムさんの言われる通り、十数年前の独我論を巡っての論争と、いまのキムさんと私との対話が、その方法・内容・方向を異にするものであるのは当然ですが、ただし、その問題の本質は不変だと思います。

もちろん私は、独我論者でも主観主義者でもありませんので、他者の私を活かすこと・他者の他者性の尊重については、キムさんと全く同じ思想です。ただ、私が思う「哲学する」とは、そのような思想や理念を具体的現実にもたらずにはどのように考えたらよいか、それを皆（私の場合は、私自身と一般の日本人の現実から始まる）の赤裸々な意識の現場から探る営みです。

さらに言えば、予めの理念やすでにある思想を前提にせず、深く生の現場から思想や理念を生み出す試み、単なる言語的・理論的整理を越えて、皆の生活実感にまで届くように「考え」を練り進めること、その営みを私は民知としての哲学と呼んでいます。そこまで進んではじめて哲学は現実的な力を持つと考えています。

なお、わたしは、この「民」ということばにマイナスの意味があることは承知していますが、だからこそあえて「民」を使うのです。柳宗悦らの『民芸』—高級品でない普段使いの品々には「用の美」があり、そこに普遍的な美しさがあるとする見方をわたしは支持していますが、それと同じく『民知』という「用の知」としての哲学に、学知としての哲学以上の価値を見るのです。伝統的な意味・価値の呪縛から自他を解き放つ「文化記号学的価値転倒」の営みだ

と言えましょう。

話を戻します。

独我論の問題ですが、どうもいまの日本では、「論」という次元を遥かに越えて、思想はいらない、主観それ自体が悪であるという想念が蔓延しているようです。政府が示す枠組み＝思想については疑わず、その枠内で考えるというわけです。教師や公務員（に限りませんが）は、政治的意見を言うてはならない！と多くの人が信じ込まされている集団同調の国では、思想上の論争それ自体が成立しません。思想を語るのは、権力者と一部の選別されたコメンテーターのみに許された行為のようです。愚かな話ですが、独我論は、溶解して日本主義という「集団的独我論」となっていますので、出口が失われています。この入り口も出口もない状況を変えるには、ふつうの市民が自分で考える営みをするための条件整備—根本的な発想転換・価値転倒が必要で、それがわたしの進める民知としての哲学です。従来の思考法・学を越えて、自他の心の本音＝黙せるコグトーに届くまでに「考え」を練り、揉み、進化させなくてはならないと考えています。それは、恐らく人類知性のありようの転換という地点にまで進み行くのではないのでしょうか。言語中心主義を超える壮大イマジネーションの哲学ですが、心身全体による会得を原理としますので、温故知新の試みとも言えます。

少しズレました。わたしは、この「集団的独我論」という矛盾した概念として表現する他ない事態を変えていくための原理は、自分の意識の内側をよく見ること、わざと徹底して主観に就くことだと思えます。自我の殻を破って広がりゆく精神＝純粹意識は、自分を深く肯定できないとよく働かないからです。肝心なのは、意識の二重性の自覚＝自我（経験的な次元）と純粹意識（意識の働きそれ自体）の違いをよく知ることでしょう。

そもそも意識とは何ものかについての意識であり、それ自体を取り出すことはできませんから、私の意識をていねいに見ることは、意識の内実である他我・自我・物・自然・・・をよく見、知ることにになります。

元来、哲学とは主観性の知です。多くの人が専門知や事実学による抑圧から解放され、主観を開発し、自分の頭で考えることを可能にするための「考え」をつくり、それを実践すること。それが何より急務だと思っています。

今回は、哲学の出し方＝始発点の問題と、そこから帰結される民知という考え方＝民知にまで徹底された哲学について触れました。もし、市民・生活者による公共哲学が可能ならば、それは民知による他はない、と私は思っています。キムさん、いかがでしょうか。

では、今日のところはこれくらいで。健康に留意され、更なるご活躍を。

武田康弘

12. 2007年6月4日 金泰昌

「哲学する友」へ 他者の他者性の尊厳を重視する。

昨夜、大阪に戻りました。今回ソウルでのアジア哲学者国際会議を通していろいろ感じたことがありました。その中でも特に21世紀の人類と地球がかかえている哲学的問題状況、そして特に東アジアの哲学的問題状況をどのように捉えるかということに改めて考えさせられました。理論的・文献的情報・知識の交換ではなく、それぞれの国家と社会と人間が置かれた政治的・経済的・宗教的・文化的そして実存的現実条件に基づいて一人ひとりの具体的個々人が身体・心情・精神を通して実感する問題群への人格的対応・決定（決断）・責任の在り方を問うということです。

武田さんはわたくしの「哲学する友」という、わたくしの熱い思いがあるからこそ、あえて申し上げるのですが、十年前の独我論に関する議論と、現在の武田さんとわたくしの対話における問題の本質は不変だという点はたがいに改めてよく検討する必要があるのではないかという気がします。問題は不変の本質というよりは発展・変化・進化する出来事ではないでしょうか。フッサールもサルトルも、そしてメルロ・ポンティも物凄い情熱と高度の知性を総動員してこの問題に取り組みましたが、意識哲学の立場からは自他意識の隔たりを埋める（媒介する）ことが結局不可能でありましたし、唯一の代案と言えば、自己（意識）のワナから脱出して他者へ向かう超自我的指向性を躍動させるということでありました。しかしそれが何らかのかたちで自己（意識）の拡大・開眼・進化の（大きな？）地平＝世界＝宇宙の中に他者（意識）を包容するのであれば、すでに他者はその他者性を自己の拡大の中で消失してしまうのです。ですからデリダにしるリクールにしる、そしてマルセルにしるレヴィナスにしる、意識哲学から言語哲学への転換を選択せざるを得なかったと思います。誤解しないで欲しいのは、だからわたくしが彼らに従って言語哲学を受容することではないということです。問題のあり方が進化したのです。私たちの問い方が変わったとも言えるでしょう。わたくしは東アジアで特に日・中・韓

の人間たち—公民とか国民というよりは私人という立場から—がどうすれば互いに向きあい、ともに幸せになる世界を語りあえるか、そしてそこから国民国家という自己（中心の）世界の究極のあり方への執着から解放され、より実存的幸福の実現が可能になれるまったく別次元の世界—わたくしは相和と和解と共福の公共世界と称しています—を共に築くことができるかということを経典の課題にしているのです。ですから抽象論とも客観学とも事実学に偏向しているものとも違います。それは自他共創の生活世界であり、そのための自他共働の知・徳・行の連動変革であり、何よりもすぐれた意味の自他相生の哲学運動であります。

武田さんの「民」に対する考え方もよく理解できます。わたくしもそのような角度から民主化を民生化—民富化—民福化という三次元相關的に捉えて「民が主人になる」ということは「民が主体的に生きる」ということであり、「民が身体的・心情的・精神的な富を築く」ということであり、「民が自己と他者の相関幸福を実感する」ようになるということであるという実践活動をしてきたのです。ですから今までメクラであり、ドレイであった「民」が主人として生命・生存・生業の真の主人＝当事者＝決定者であるという思考と行動と判断が何よりも大事であるとも考えています。

しかしそれと同時に「民」という漢字の本来の意味とその使用例についてのきちんとした認識を通してそれがもたらす直接・間接の否定的影響を警戒する必要性も念頭に入れるべきです。例えば、官尊民卑とか官尊民従とかいう発想や今日のいたるところで見られる官僚たちの民を無視する行態は、長い歴史を通して蓄積された「民」への心理的偏見が今もまだ存在するというものではありませんか。ですからその自覚が必要であるということを申し上げているだけです。

わたくしは武田さんのおっしゃることを誠実に理解するための努力をしています。そして武田さんの立場・信念・行動を尊重します。ただわたくしは民族・文化・国境・宗教を異にする人間たちの対話と共働と開新をすすめ

て行くことに全力投入しているわけですから、意識哲学＝主観性の哲学＝考える哲学と同時に対話の哲学＝共働の哲学＝開新の哲学を語りあう哲学としてその必要性を強調せざるを得ないのです。これはまず理論＝理念＝パラダイムがあつて、そこから現実をそこに合致させるのではなく、日々ぶつかる問題状況から哲学していくことなのです。わたくしはほとんど毎日そのような問題状況の中で生きていますから。わたくしの今までの経験から申せば、意識は純粹意識であれ、自（己）意識であれ、「誰々の内面」に収斂する傾向がありますし、また志向性（何々についての・何々に向かつての意識のはたらき）と言っても自己から他者へ向かう一方的な作用になるという限界を乗り越えられないと思うのです。わたくしは他者を理解するよりは他者を尊敬することが大事であると思うのです。他者は自己の理解を超える神秘—聖なる地平であると考えるところに他者の他者性の尊厳を重視する心構えが成立しますし、そこから真の人権思想も出てくると思うからです。

金泰昌

13. 2007年6月6日 武田康弘

「主観性の知としての哲学」は、「意識主義」ではありません。



二年前の今日は、全く未知の方だったキム・テチャンさんから初めてお電話があった日。

左の写真は、一週間後(6月15日)にテチャンさんが来館されたときのもの。(撮影:武田)

私もキムさんを「哲学する友」だと思っていますので、忌憚無く書きます。

かつての独我論論争についてですが、わたしが「問題の本質は不変だ」と言うのは、認識の原理論の次元では、という意味です。なお、何が不変で、何が異なるのか?は、当時の討論資料がありますので、必要ならば、それを参照して詳細に検討できますが、公平を期するためにも、高齢ながらまだご健在の竹内氏と今も活躍中の竹田氏にも参加してもらわなければなりませんし、何日もかかる大テーマです。

次に、「意識主義の立場」ということですが、私はもちろん、竹内氏や竹田氏も意識主義ではありません。それを乗り越えるために竹内氏は、意識（前意識や無意識を含む）の立体的把握のために言語の次元の相違に着目して「言語階層化論」を展開しましたし、竹田氏も形式論理の言語学を超えて、生きた現実言語の意味を捉える「言語本質論」を確立しました。両者とも、近代の意識主義と現代思想＝ポストモダニズムの双方を超えるために努力を重ねています。

また、国民国家の問題及び共生の問題は、ずっと追及してきたことですので、

キムさんの国家主義への批判は全く同感ですが、市民主権の民主制社会における国家の姿について更に考えを深めたいと思っています。

「民」についてもキムさんと相違はないようですが、繰り返しますと、わたしはすべて承知であえて「民」を使うのです。従来の伝統的価値を逆手に取り逆転させる（記号学的価値転倒）ことが、ダイナミックな変革のためにはどうしても必要—それが強い思想だ、というのがわたしの考えです。

なお、「意識の志向性」（ブレンターノの言葉を発展させたフッサールの概念）とは、認識の原理・本質論次元で出てくる概念であって、経験・具体レベルで「自己から他者へ向かう一方向な作用になる」という話を持ち出すのは、次元の違いを超越した見方でしかないと思います。

また、「理論＝理念＝パラダイムがあつて、そこから現実をそこに合致させるのではなく、日々ぶつかる問題状況から哲学していくことなのです」は、わたしの人生そのものであり全く同感ですが、それと認識論の原理をしっかりと踏まえるというのは次元の違う話です。

その次の「意識哲学＝主観性の哲学＝考える哲学」という並列は意味がよく分かりません。「同時に対話の哲学＝共働の哲学＝開新の哲学を語り合う哲学の必要性」というのをなぜ対比させなければならないのか？わたしには疑問です。わたしの主張している「主観性の知としての哲学」とは、生きた有用な対話を可能にする哲学の原理であり、それらは一体のものなのですから。

最後に、

「他者を尊敬することが大事」「他者は自己の理解を超える神秘—聖なる地平」「他者の他者性の尊厳を重視する心構え」というのには、異存はありませんが、哲学するとは、このような思想や理念がどのような条件の下で花咲くのか？

を追求することではないでしょうか。よき理念を提示するだけでは、学校が掲げる目標と同じになってしまいますから。

わたしの「民知にまで徹底させた哲学」や「主観性の知としての哲学」とは、対話こそが哲学の命だとか忌憚のないご意見をといくら言われても、実際には、立場に縛られて自由対話ができない社会の現状を変えていくための考えなのです。他者の他者性の尊重や、生き生きと言い合い・聞き合いの自由闊達な対話や、共働や開新を可能にするためにはどうしたらよいかを考え、実践しているのであり、キムさんのお考えと異なるわけではありませんが、わたしはそれを阻む思考法・思想を批判し、どう考えればそれを実現できるかを探っているのです。それがわたしの哲学と実践＝人生そのものなのです。(2007. 6. 6.)

武田康弘

14. 2007年6月7日 金泰昌

日常の生活世界も理性の外部でないことの確認ができました。

ご丁寧なご説明ありがとうございました。武田さんのお使いになっているいくつかの用語が、所謂現象学の立場を取っていないか、また、それとは反対の立場からものごとを考えている人々にとっては必ずしも自明ではないので確認しておきたかっただけです。わたくしの念頭の中のどこかにちょっとありました余計な懸念の雲が晴らされました。わたくしはいろんな側面で未熟なものですから、よく分からないところがいっぱいあると思います。特に日本ではほとんど常識的になっていることでもわたくしとしてはゼロから学ぶしかないわけですから。武田さんをご指摘なさったように、竹内さんや竹田さんにも何時か適当な時期に教えていただくチャンスがあれば幸いです。

「意識主義の立場」のことも一般的には意識哲学としての現象学は無意識に対応できないと理解されていますし、そのような批判を激しく展開している方々が日本にもいらっしゃいます。ですから武田さんとわたくしの立場は、前意識や無意識も含めて理性の外部として排除されてきた日常の生活世界における、一人ひとりの具体的・実存的私人たちの身体感覚までも立体的＝相関的に捉えるということを確認しておく必要があったからです。わたくしはまったく無名の人間ですから、事前の予解事項として素直に受け入れてくれるかどうか定かではないでしょう。わたくしは、所謂理性主義的観念論者だとか認識・理念・パラダイム原理主義者ではないかというような批判・誤解も受けたことがありましたので、武田さんとわたくしの対話にまでそのような雑音が生じることを防止するためであったのです。武田さんがどうだというよりは、自己警戒の意味が強いものなのです。

武田さんのおっしゃる「記号学的価値転換」は大変重要かつ有効な対話と共働と開新の哲学の基軸の一つであります。ですからあえて、「民」という漢字を使いつづける武田さんのご意向を十分理解します。わたくしが「民」とも

に「私人」ということばを使うことのわたくしの意図も分かっていただければありがたいと申し上げただけです。

「意識哲学＝主観性の哲学＝考える哲学」という並列はオクスフォードとケンブリッジでの公共哲学フォーラムで特に将来世代と現在世代の相互関係に関する激論の最中に出てきた反デカルト主義の一人のイギリス人哲学者の発言にあったものです。そこでわたくしが公共哲学はデカルト—ヘーゲル—カントに代表される理性中心の思考・意識に偏向した大陸観念論とは基本的な発想がちがうということと、むしろスコットランド啓蒙主義に似ているところがあると反論したことがあります。ですからあえて言えば、経験論・道徳感情・実践知を重視する哲学運動であると説明したときから時々使うようになった言い方です。武田さんのお考えにそぐわないところがありましたらそのような事情から生じた立場表明の一つにすぎないということをご理解をお願いします。

武田さんが“「最後に」でおっしゃったように「思想や理念がどのような条件の下で花咲くのか？を追求する」”哲学を私たち二人で語りあいたいと思っているわけです。それを阻むものを批判し、その実現方法を探る哲学とは、果たしてどのようなものなのかと。ただ今まで生きてきた世界とそこで体験した事柄とそれに基づいて形成された自己了解と世界認識がちがうところもあるでしょうから相互理解がすぐ成り立たない場合も多々ありえますね。しかしそれはそれで意味があると考えられるのではありませんか。

わたくしは、武田さんの考えていらっしゃる公共性というのを知りたいのです。何回かお書きになったことを読みましたが改めて武田さんのご意見をお聞きしたいのです。

金泰昌

15. 2007年6月8日 武田康弘

基本合意が得られましたので、公共に開きましょう。

キムさんのお返事、基本的に了解しました。

「武田さんとわたくしの立場は、前意識や無意識も含めて理性の外部として排除されてきた日常の生活世界における、一人ひとりの具体的・実存的私人たちの身体感覚までも立体的＝相関的に捉えるということ」の確認がしっかり取れ、深く合意に達したことは、大変よろこばしいことです。

なお、竹内氏や竹田氏の極めて優れた業績は、日本の学者〈学会〉の中でも知っている人は少数で、「常識」にはなっていません。多くの学者は、現象学に対する理解も古い常識に縛られたままです。わたしは、竹内氏は旧世代の最良の読解者であり、竹田氏は竹田現象学とでも呼ぶべき新たな地平を切り開いた人物で、本質論次元で見れば、欧米の哲学界を超える仕事をしていると思います。

また、「公共哲学はデカルト－ヘーゲル－カントに代表される理性中心の思考・意識に偏向した大陸観念論とは基本的な発想がちがうということと、むしろスコットランド啓蒙主義に似ているところがある」との見解に対しては、わたしは、再検討が必要だと思いますが、今はこの議論は保留とさせて下さい。

それでは、

【武田さんが“「最後に」でおっしゃったように「思想や理念がどのような条件の下で花咲くのか？」を追求する”哲学を私たち二人で語りあいたいと思っているわけです。それを阻むものを批判し、その実現方法を探る哲学とは、はたしてどのようなものなのかと。】

という基本合意が得られましたので、いったんここで対話を休止し、これまでの成果を公共に開きたいと思います。読者の皆様の反応を待って、続きを再開致しましょう。

武田康弘

16. 2007年6月8日 金泰昌

[二人の対話を公共時空へ.](#)

今朝、武田さんのメッセージをいただいて読みました。それで今までの対話の進み具合が整理されたと思います。

わたくしも、ここでわたくしたちの対話を二人の間に閉じておくのではなく、他の人々にも開いて多様な意見が交じりあう公共時空にしたいと思います。

武田さんの部分だけではなく、わたくしのものも含めてより見やすく、読みやすくするための工夫をお願いします。わたくしは古い人間で恥ずかしいことにコンピューターを自由に使いこなせないのです。

金泰昌